

# 白金霞

12月号



平成27年12月発行

第58号

# 白金葎定例会句会案内

一月十五日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三:新年一般

二月十九日(金) 12:00 ~ 15:00 コピアン・露の臺、ブレタインの日

三月十八日(金) 12:00 ~ 15:00 第三:御水取、鳥臺

## 新年一般の参考句(一月十五日分)

伊勢海老のびくんとたかが二千年

詠進歌に牛や馬いて歌会始

子等が住む 家それぞれを恵方とす

諸共に寿ぐ老の福茶かな

つなぐ手を離しお降り確かめる

笑初して少年変声期に入りぬ

ぬば玉の寢屋かいまみぬ嫁が君

読初めは荻生徂徠や致道館

櫟や受け継ぐ父の鋸鉋

南座の餅花あかり旅三日

三日はや生けるしるしのゴミを出す

松過ぎの又も光陰矢の如く

精神はぼつぺんは言うぞぼつぺん

蓬萊や東にひらく伊豆の海

庭隅の幹に日のある二日かな

櫛未知子

金子兜太

渡邊絵衣子

磯田みどり

こしのゆみこ

石川和子

芝不器男

古川京子

小原きよ

山尾かづひろ

谷山花猿

高浜虚子

阿部完市

水原秋櫻子

桂信子

月例会句会報(15/12/18 10名欠2)(鋤焼、冬夕焼)

飯田孝三

「枯葉」ふつと口遊くちずさむカフェを出いでて

海神わたつみの方へ傾かたぶき返り花

スカイツリーに灯が入る冬夕焼

すき鍋や大方子連れ好いた同志

さあ帰る鳥も帰る冬夕焼

増田陽一

動かねば五体枯葉に埋まるなり

観覧車大円めぐる冬夕焼

いづれが黒きファール・サテイの冬帽子

炭爆ぜる香や戦前の鋤焼は

妻を看みてわが頂点の冬日かと

光成高志

Santa Claus is Coming to Town

「サンタが街にやってくる」のBGMのカフェに座る

冬夕焼飛行機雲に及びをり

岩垣の隙を覆ひて石路の花

蜜柑山初島小さく平なり

鋤焼や火事で死んだる牛を喰う

一枚の落葉をいぢる象の鼻

すき焼のあと日本の歌うたふ

縄跳の中に入れたる寒落暉

冬の蠅禿頭にゐて身じろがず

制服の乙女が帰る冬夕焼

朔の産土参り十二月

冬夕焼杖つく身にはみな優し

すき焼の葱を好みし人なりし

冬に入る正座の膝に両手置き

朝な友な神の山背に冬耕す

石州紙の大蛇がさりと寒に入る

大蛇の尾果てておごめく神遊び

とぐる解く大蛇は男冬の汗

少年の正座して吹く神楽笛

紙・油大蛇匂へる神楽かな

光  
み  
ち

短日の象は象舎へおのづから

短篇を読むやうな冬夕焼かな

すき焼の港神戸の夜景かな

測るたび血圧大違ひ日短か

笑ひつつおどかす医者や十二月

吉羽多美子

冬夕焼背に負ひて坂下りけり

茶の花のこぼるる程の静寂<sup>しま</sup>かな

からっ風の転がして行くレジ袋

インフルエンザの予防注射をためらひぬ

探梅や肩越し覗く枝の端

倉田紀子

松村幸一

武者昭七

浅野正美

冬夕焼梢の中に星光る

今日という良き日ありけりすき焼す

夫と見し冬夕焼と筑波山

黄落の明るさ残る校庭かな

すき焼を母と二人の夕餉かな

青木啓泰

馬匹車が冬夕焼の村に着

上京や冬青空の外務省

冬至風呂追だきかけて一人入る

初霜や登校児童の声バラバラ

蓮田中自分で引っぱる田舟かな

佐藤宏之助

綿虫を掬ふ香煙受けし手に

すきやきのとろりとろりと葱甘し

冬夕焼牧水の歌碑読みをれば

只寒しここは主税の自刃跡

暮れ早し大歳時記をぴしやと閉ず

田宮敦子

冬夕焼家に入れろと猫の鳴く

冬あかねかたかたかたとランドセル

冬夕焼ビルの間に黒い富士

煮立ちたるすき焼鍋の重さかな

オーケストラ指揮者はサンタ眼鏡かけ

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

4 短日の象は象舎へおのづから

4 冬夕焼ビルの間に黒い富士

3 蜜柑山初島小さく平なり

3 一枚の落葉をいぢる象の鼻

3 冬夕焼飛行機雲に及びをり

3 動かねば五体枯葉に埋まるなり

3 観覧車大円めぐる冬夕焼

3 綿虫を掬ふ香煙受けし手に

3 冬至風呂追だきかけて一人入る

3 すき焼のあと日本の歌うたふ

2 冬夕焼背に負ひて坂下りけり

2 冬夕焼背に負ひ坂を下りけり

2 縄跳の中に入れたる寒落暉

幸一

敦子

高志

みち

高志

陽一

〃

宏之助

啓泰

みち

昭七

みち

孝三

敦子

幸一

みち

紀子

宏之助

幸

高志

昭七

啓泰

正美

幸一

紀子

考三

多美子

3

宏之助

714

昭七

初霜や登校児童の声バラバラ

啓泰

初霜や登校の児童声バラバラ

すき鍋や大方子連れ好いた同志

孝三

「Santa Claus is Coming to Town」  
「サンタが街にやってくる」のBGMのカフェに座る

高志

馬匹車が冬夕焼の村に着

啓泰

冬に入る正座の膝に手を置きて

多美子

冬に入る正座の膝に両手置き

インフルエンザの予防注射をためらひぬ

昭七

炭爆ぜる香や戦前の鋤焼は

陽一

紙・油大蛇匂へる神樂かな

紀子

さあ帰る鳥も帰る冬夕焼

孝三

煮立ちたるすき焼鍋の重さかな

敦子

妻を看みてわが頂点の冬日かと

陽一

すき焼を母と二人の夕餉かな

正美

## 一句鑑賞

光成高志

## 冬夕焼ビルの間に黒い富士

敦子

夕焼けの西の空が真赤になり東の空まで染めつつある。電車の窓から黒い富士山がちらりと見えた。ビルの間に。行き行くとまたビルの間に見えた。その時の感動が尾を引いて心をあたためている。冬夕焼けの中の黒い富士山はやっぱり永遠な日本の風景である。

## 冬夕焼梢の中に星光る

正美

夕焼の空を見透かす枯木の梢の中に早一番星が光っている。宵の明星である。一日の終わりを告げる星。一番星が出たから帰ろうよとのメロデーが流れる町である。今月は金星は明け方に東に見える。今年の始めは日の入後西に見えたので、その頃の句であらう。

## 短篇を読むやうな冬夕焼かな

幸一

この句よくよく読むとなるほどそういうもんだなあと思う。敢えて理屈つけると、冬夕焼けの消えるまでに短篇は読めるしその中に起承転結があつて面白い。掌篇小説というのは短篇小説より更に短く、これでもいいかも知れない。

## 綿虫を掬ふ香煙受けし手に

宏之助

トドノネオオワタムシは体長は最大で4mm程度。日本では、北海道、東北地方を中心に、10月〜12月頃空中を漂う姿が見られ、まるで雪が舞っている様に見えることから、雪虫の愛称で知られる。伊豆ではしろばんばと呼ばれる。私が初めて見たのは、宏之助さんに誘われて高幡不動の誓子句碑にお参りした時である。掲句は、毎月月命日にお参りされ清掃もされる宏之助さんの熱い思いが直伝わって直選。次の二句を想起。

綿虫のこの小娘を捕へ得ず（誓子）

大綿は手にとりやすしとれば死す（多佳子）

からつ風の転がして行くレジ袋

昭七

レジ袋とは、コンビニやスーパーなどで、購入した商品を入れるためにレジで渡されるポリ袋を指す。用済みになったらゴミ袋としても便利だから、これがゴミ集積所に山積みされていたりする。空になったレジ袋は風でも孕めばすぐ飛んで行くし、空つ風に転がっていくのはよく見かける風景。下町の路地や場末の飲み屋などの前で見かけた風景だと思う。生活するとはこういうこと、という作者の山川草木悉有仏性観が見えると思います。

### 一句鑑賞

武者昭七

石州紙の大蛇がさりと寒に入る

紀子

とごろ解く大蛇は男冬の汗

〃

一句目。石州紙は石見地方（島根県西部）で生産される和紙。腰が強く丈夫なので知られる。この地方にはヤマタノオロチ退治に材をとった神楽が古くからあり「大蛇」とはそのこと。石州紙をはぎ合せて作った巨大なつくりもの。「がさり」はその重さ、大きさであり同時に寒に入った確かさをいう。一句目。神楽を終えて作り物から出てきたのはなんと大蛇を演じて大暴れしたイケメンの若者。さすがに汗が光る。季節外れの汗に演じきった男の満足感が匂立つ。作者は幻想世界から立ち戻る。

海神わたつみの方へ枝張り返り花

孝三

「ワタ」は海、「ツ」は「の」、「ミ」は古代人が畏れた偉大な霊力。単に海の広がりというだけでなく水や雨や雲を支配する神霊をいう。作者は冬の岬に立つて遙かな海原に向って枝差し交して咲く帰り花を見た。それを海神に供えられた幣とみたのである。作者は古い社家の血を引くひと。遠い昔、ワタツミの神に念じながら波の穂わけてこの列島にたどり着いたわれらの遠つ祖オヤたちにささげる鎮魂のうたでもある。

一枚の落葉をいぢる象の鼻

みち

図体の大きい象が足元に一枚だけ舞い込んできた落葉を所在無げに長い鼻の先でいじくりまわしている。象はさみしいのである。遊びたいのに誰もいないのだ。相手するのは葉っぱだけ。ぼくらは少年の頃寂しい時はむやみになにかをいじくりまわしていたように思う。「いじくる」といったところに象の孤独が見事にとらえられている。

短日の象は象舎へおのづから

幸一

短日は日暮れの早いこと。日暮れに象が象舎に戻るのには当たり前だけれど、「おのづから」と言われるとなんとも悲しい。大草原の華麗な落日から引きはがされそれが自分の宿命のように素直に冷たいコンクリートの部屋に帰っていく象。飼いならされてしまったものの悲哀

がリズムからも伝わってくる。動物園の夕方ととらえてみた。

## 一句鑑賞

増田陽一

### 短日の象は象舎へおのづから

幸一

3時になると、はや夕暮れの気分になるこの頃、獣たちも日暮れを敏感に察知して、飼育係に追われるまでもなく、屋根のある寝処に向うと言うのである。上野だつたら河馬、縞馬、オカピなども閉園近くなるとコンクリートの寝間に入ったのを見る事が出来て、近くから見るとこれらの動物の大きさに感心する。そして狭い独房での日暮の野生動物は短日の気分と共にとても孤独な感じがするものだ。長い年月、動物園に慣れた象の哀れさが感じられる句である。

### 一枚の落葉をいぢる象の鼻

みち

これも象である。「いじる」に鼻の器用さが出ていて、人間なら「手慰み」と言うところであろう。やや寂れた冬の動物園。この象は鼻先で倦怠感をまぎらせて居るのであろう。

### 蜜柑山初島小さく平なり

高志

おのずから、「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよるみゆ」と詠んだ源実朝の歌が浮ぶ。特に「蜜柑山」が好い。相模湾の紺碧に蜜柑の黄色が映え

て晴朗な景色、楽しい道行きのようである。

### 「枯葉」ふっと口遊ぶカフェを出て

孝三

イヴ・モンタンが歌うシャンソン「枯葉」の中に歌詞の朗読ではじめるのがあって、彼の渋い朗誦のフランス語が何とも粹で、歌以上に気分が出るのであった。歌詞はジャック・プレヴェールであったか。カフェを出て帽を傾け小声に「枯葉」を口ずさむ紳士。まさに孝三さんの自画像ではないでしょうか？

### 冬夕焼杖つく身にはみな優し

多美子

本当である。杖に縋って衰れっぽく歩いていると時にそれを感じる。冬夕焼の中では更にひとの温もりが身に沁みる。それにしても昨今、杖突いている人の多さよ。茶の花のこぼるる程の静寂かな

昭七

茶の花は白く小さく、散るにしても、近縁の山茶花が散るような派手さはない、つましい花である。それが「こぼるる」という微妙な動きがあつて、なお静寂が深く感じられるのである。

### 冬夕焼、ビルの中に黒い富士

敦子

東京の市中でも富士の見えるビルの間隙はあつて、絶景は何処だと話題にもなる。そんなところに見た富士は鮮やかな冬夕焼のなかにあつた。逆光に見る「黒い」富士が印象的である。



## 一句鑑賞

飯田孝三

いづれが黒きフアーブル・サティの冬帽子

陽一

フアーブルはご存知『昆虫記』の著者、黒い山高帽にフロックコートは、お馴じみの定版スタイル。昆虫とくに蜂の生態観察に優れ、進化論に抗し、広く自然研究の方法を教えた。エリック・サティは、約半世紀遅れて生れ、ほぼ同時代を生きたフランスの作曲家、反ロマン主義の作風で知られ、新古典主義の先駆をといわれる。陽一さんのお話では、黒い帽子が好きだったらしく、愛用した。さてどっちがより黒い、と自問されるのである。独力で学び名を高めたのも両者共通すること。季語「冬帽子」の幹旋の機微さながら、胸懷の深さが窺われる。

冬夕焼飛行機雲に及びをり

高志

冬の夕焼けはすぐ消える。頭上を後方に飛び去る飛行機雲の尾が、しだいに、薄れ、広がりがら夕焼けに染まる。それを見上げ束の間の茜を惜しみつつ、立ち尽くすのである。末「をり」が臍、刻々の時の移りと広い空間をとりこみ、感興の深さが滲む。別に「鋤焼や火事で死んだる牛を喰う」、「鋤」焼は、その名の由来を辿るかに、諧謔を滲ませ、ほろ苦い。外連ない口誦は照れかくし、喰「う」は、敢えて当用の俗に依ったのだらう。縄文の話ではない、今のわれわれのこと。焼死はまだしも

屠殺して、自分らよりずうつと図体のでかい動物を食べ  
てしまふ、老若男女談笑しながら。因業因業。ついつい  
余談、とまれ掲句とは全く別趣。

短日の象は象舎へおのづから

幸一

一枚の落葉をいぢる象の鼻

みち

はからずも、共に象を詠む。(前句)「おのづから」  
が悠揚迫らぬ、巨象の振るまいをまさと眼前させて余す  
ない。短日の慌ただしさとの対照が醸す諧謔が面白い。  
(後句)一枚の落葉という、木端にまつわる巨体の鼻先  
の仕種がいぢらしい。「いぢる」がお手柄、鼻先の器用  
さが目に染みる。囲われ者の所在なさだろうか。たまに  
は、夕日のアフリカの大地を歩かせてやりたくもなる。  
両句の視点は違うが、どちらも紛れなき象の姿である。  
とぐる解く大蛇は男冬の汗

紀子

「大蛇」三句の一つ、別の「石州紙の大蛇がさりと寒  
に入る」も、擬音「がさり」は紙の手触りそのもの、如  
実、寒入りの氣と響き合う、が、絞るなら掲句。「とぐ  
ろ解く」が偉容、「大蛇は男」の断定が外連なく、豪氣、  
毫も位負けしない。一転、「冬の汗」の落着は臨場の真  
に迫り、なお艶<sup>あで</sup>に粹。はて「冬の汗」の主は、男それ  
とも女性、その辺り読み手にお任せるのも憎い。え、雌  
もとぐろ？ いやそりや、あのお・・・人間の・・・

## 冬至風呂追炊きかけて一人入る

啓泰

冬至風呂の当世模様、家庭篇ワンショットである。「追炊き」の斬新さが抜けている。この頃はボタンを押したけなのも、そこはか籠る悲哀を深めて、おかしい。「かけて」が老練、内包をふくらませる、なるほど「つけて」では句にならない。ただ、「一人」「入る」は駄目押し気味、「追炊き」をかけて一人の冬至風呂」などもあるだろうか。これはこれは、臆面もない妄言をお許しください。  
冬夕焼杖つく身にはみな優し

多美子

冬空の夕焼けは束の間を輝き、厳しさを秘めて鮮やかだ。「みな優し」は、情韻交々、しみじみ身に染みる優しさである。「みな」は人々が皆ばかりではない、冬夕焼に映える乾坤あげて、一とき、わたしを、人々を優しく包んでくれるのだ。主情の辞の濫用は、俳句では、程度だが、ここ一番、決まると見事。季題の一語「冬夕焼」がまざと目に見せる、一服のカラー映像である。

## すき焼のあと日本の歌うたふ

みち

ふつと目頭が熱くなる。「うた」は、誰も幼い頃から親しんだ、童謡、唱歌（はたまた歌曲などだろう）。焼肉は古く大陸渡来というが、「すき焼」はこれを純化した、みんなにつとに親しまれ、誰もが知る日本の料理。日本の心の歌になにげなく「すき焼」を配する、阿吽の妙にほとほと恐れ入る。野暮なご託宣は止め、さあ「日

本のうた」を歌おう。用字の心配りも自づとゆき届く。はて、近頃、街に氾濫する歌はどここの「うた」なんだろう。  
(出句一覽掲載順)

## ハガキ句 58 報管見

飯田 孝三

音立てて銀杏の降る中にゐる

敏子

黄葉が日を浴びて散り敷く中、「音立てて」銀杏が降る。それを聞き、人は、ふとわれに返る。思い起こされる場面はそれぞれであれ、皆、重ね来たった日々を思う。「音たてて」が鍵。印象的かつ象徴的である。「ゐる」の自然態がいい。そこに、「人生の思い」が集約されている。因みに、「降る」は、類義の「散る」、「落ちる」が瞬間の動きを捉え、「下行」を印象づけるのに対し、ある空間を下に「移行」するさまを想像させる。時間と空間を孕む。「散る」、「落ちる」の“点”、“動”のイメージに比べ、“面”的、“時空懷抱”の観がある。してみれば、この場合、「散る」、「落ちる」ならぬ「降る」でなければならぬのは明らかだ優れて映像的だが、掲句はもともと聴覚の句である。いわば立体的構造をもつ。句の懐深さの所以だろう。

北信濃空家の軒の柿簾

高志

晩秋、北信濃の固い空に柿簾のきらめきが響交う。柿簾が懸るのは空家の軒だ。その地の過疎の状況が眼前す

る。助詞「の」二字の外は漢字の名詞を並べた一本仕立が、「の」三音の調べと相まつて、視線を結「柿簾」に収斂させ、加えて、K音を畳む、一句の韻きが北信濃の風土に通い、一段と、あたりの荒廃ぶりを印象つける。言わず見せる即物、硬質の迫力を見る。一方、その裏側にある思いが見えてくる。

### ハガキ句 58 報（'10 / '11 / 4）

盆燈籠畦にともして千枚田  
老の手はすべり易くて桃李  
蠅螂ノタクト百蟲コンチェルト  
聖路加の鐘の抑揚青嵐  
鈍き刃のつきあたりたる柿の種  
身に入むやときに人より犬を愛す  
冬瓜の並ぶやネットショッピング  
音立てて銀杏の降る中にある  
秋深し電話の中に時計鳴る  
北信濃空家の軒の柿簾  
流木の逆さに懸り草の花

羊三  
孝三  
璃子  
かづひろ  
彰一  
敏子  
高志

秋深し電話の中に時計鳴る

敏子

電話の中に、相手の電話が鳴るのを聞いて、秋の深まりを今更に感じる。身辺を詠んで、易しく、深い。「秋深し」が寸も動かない。ただ、同時に、それが主情の季語たる制約をうけ、前々句「音立てて」に一步譲る気がする。

流木の逆さに懸り草の花

高志

前々句「北信濃」と同じく、同地で囁目した荒廃の情景だろ。うか。「草の花」が印象的である。

鈍き刃のつきあたりたる柿の種

璃子

「柿の種」につき当たったのが、鋭からぬ「鈍き刃」である。尤も、鋭き刃では句にならない。鈍く太けれど、刃は小さき柿の種をとらえ、敏を失わぬ。かつ、動じない。身辺の些細に感じつつも、それに惑わされぬ意志の謂いだろ。うか。柿の種は小さいが固い。「鈍き刃」がふさわしいのかも知れない。そんな受け止めもできるだろ。うか。示唆に富てだ一句である。

身に入むやときに人より犬を愛す

璃子

人は人を愛する、愛さずにはいられない。けれども、犬が無性に愛しくなるときがある。真実、「身に入む」や。「とき」が臍。

聖路加の鐘の抑揚青嵐

かづひろ

「聖路加」を称するものに、寡聞、著名な病院の外は知らない。内、または、まわりにチャペルがあるのだろ

うか？ 青嵐が鐘の音をあおる。立姿の決まる一句である。「抑揚」の漢字成句をほぐすと、また別の風合が加わるだろう。

冬瓜の並ぶやネットショッピン

彰一

ネットショッピン

盆燈籠畦にともして千枚田

羊三

情景が目の当たり。昔、田舎で眼にした、広々とした青田に盆燈籠のともる風景を思い出した。ただ、「盆燈籠」が人事、「ともして」も人為。一考の余地があるだろうか。

(平 22・11・11)

お便り広場 (到着順、敬称略)

白金葎十一号頂きました。璃子さんが澁刺としていますね。大分喜んでいました。私は来年の俳人協会のカレンダーを頂きました。来年の出版迄は今迄どおり送金しますから出版の目途がたった時、温泉旅行でも行ってゆっくり休んでください。特にみちさんにラクをさせてあげて下さい。不足しましたらご連絡下さい。益々のご活躍を祈ります。

(11・30 小山陽也)

玉誌「白金葎」57号を有難く拝受御礼申し上げます。買

主を社長呼ばはり大熊手(光みち)約十年も昔の浅草の西の市に案内してくれた美女市川泰子さんの笑顔まで想い出して胸が熱くなります。勝手口泥つき大根届けらる(浅野正美)早起きしてポストに新聞をとりに出てみると門の鋳物の門の扉の下に大きな泥つき大根一本近所の農家の山木明子さんからのプレゼント、白菜の時は安藤弥子さん、笠地蔵のおはなしを連想。感謝！。皆様尚ご健筆を祈念しております。草々

(12/1 河村博旨)

定まらぬ日が続いておりますが、お忙しくお元氣にご活躍と存じ上げます。白金葎十二月号拝受より日が過ぎ失礼いたしました。このところ、思い立って畳屋さんに入ってもらったりのついでに片付けに手を染めました。らかえって散らかり自分で墓穴を掘ってしまいました。そんな訳で楽しみは後にと多彩な中味の白金葎を熟読できずおります。一人で何もかも決めて実行はタイヘンです。御身おいとい下さいませ。裏第22回日展 おや？名坂賀永子の猫の絵(12・3長屋璃子)

白金葎十一月号受け取りました。大勢の句会の友があつて楽しく忙しく生きていることが目に浮びます。私ごときがのせる句もできそうにない。最終ページの飯田孝三さんの文章(姉のこと)には心うたれるものがありました。ありがとう。あとは私が作った新米(ヒノヒカリ)

少しですが送ります。何もお気遣いなく食べて下さい。高齡になって米作りも限界と思っています。敏子さん体に気をつけてあまり無理しないこと。皆さん心も体も元気で新年を迎えましょう。(今朝くすり飲んだ飲まぬと自問する)(にくいやつ玉ねぎ植えたよとう虫)年のせいか字が上手く書けない。漢字が思い出せない。まあいいか。高志敏子さんへ (12/3健三)

(ヨトウムシの句同感。私は無農薬栽培で菜園を営んでいますが一苦労するのが虫害です。キャベツなどはほって置いて青虫さんに上げます。そのうちキャベツの方が勝って巻きます。根切り虫ヨトウムシは強い。掘り出して取り除いています。俳句は文芸の一つですので、表現法など芸が要ることもありますが、生活の中であれ!とか気づいたことをメモしておくだけでいいと思います。又人様の句を読むだけでも充分活動できます。年とると物覚えが悪くなりますが、人がよく見えたり、若いとき分らなかったことが分つたりいいことも沢山あります。高志)

師走も半ばとなり、やつと東京クラブも本年最後の句会を楽しむことができました。何かと応援して下さいましてありがとうございます。白金霞には啓発されること多く、毎月ありがたく拝読しておりますが、このところ忙しくじつくり楽しむ間もなく、お正月は少しゆつくりできる折に熟読玩味いたす所存でございます。様々のことだいで感謝

御礼申し上げます。(12・4璃子)

(お礼) 先日はお世話になりました。たいへん楽しい句会でした。月例に加え、特集号の準備等々、えらくご面倒をおかけします。せいぜい確りした稿をお届けしたいと思います。なにとぞよろしくお願いいたします。いただいた生姜を早速調理に活かして、妻も喜んでいました。今年は思わぬ苦労もありましたが、あつという間の一年でした。病より転びが怖い、お互いに気をつけ、いい新年を迎えましょう。来年もなにとぞよろしくお願い申し上げます。草々

(平成27・12・20飯田孝三)

受贈誌 (H27年12月号)

彩雲となる初富士の雪煙 (彩126号) 平野ひろし

鯉木の切口燦と初日出づ (〃) 〃

神苑にモノローウオーク初鴉 (〃) 〃

初詣富士湧水のあたたかし (〃) 〃

初日影瑠璃きらめける鳩の頸 (〃) 〃

冬籠廁通いを日に十度 (〃) 〃

冬籠老人乾き易きかな (〃) 〃

台風の眼の中卵かけごはん (飛行雲77号) 駿河岳水

火祭や高齢行者仁王立ち(あすか十月号) 山尾かづひろ

火祭の夜空に富士の影大き (〃) 〃

吹き溜る回転ドアの落葉かな(東京クラブ 12月) 理佳江

暮早しままごとほどの米を研ぐ(Ⅱ) 〃

ぬけ道の修道院に冬の蝶 (Ⅱ) 武子

年の瀬や六区にじよんがら急調子 (Ⅱ) 万世遊

いつしかに蜜柑大小LMと (Ⅱ) 璃子

## こだま

芋嵐墓地を求めて西東(彩 126号) 光成高志

鉢のままほずき市より荷が届く(飛行雲 77号) 青木啓泰

## 排窓評論

「俳枕 江戸から東京へ」の(254~257) 現代俳句協会のブログを山尾かづひろさんから頂いた。毎月いただくブログの印刷紙である。このブログは2010年(H22)から始まっているからほぼ本誌と年はおなじである。冊数は今月十三日で258と大変な数である。金子兜太、宇多喜代子会長と繋いで今は誰か存じ上げないが、かづひろさんの所属結社は野木桃花さんのあすかであり、H21年には稲作の歳時記をまとまられた。本誌ではこれを見本に兼題句をまとめようとしている。それはさておき、江戸から東京への吟行句は壮大だ。私の芭蕉の軽み以後と同じだと思う。どうか続けてください。宇多喜代子さんの里山歳時記は消え行く季語の鎮魂になるのか、この気

持に同感です。 258 報より

枯葉積む堆肥の箱や山の畑 金子きよ

竹炭の炭焼小屋を覗きをり 〃

のぞき見る炭焼の小屋ドラム缶 緑川みどり

## 恋の歌を読む その九 武者昭七

つれづれと空ぞ見らるる思ふひと天下りこむものならなくに

「つれづれ」は、じつと思いをこらすさま、つくづくの意(岩波古語辞典)。「るる」は、自発の助動詞。そうしようところを決めたわけでもないのに自然とそうなってしまうさま。「思ふひと」は恋人。空を見ていたからと言ってあのひとが空からやってくるわけではないのにわたしはついぼんやりと空を眺めてしまう。まるで空からあのひとがやってくるみたい、というのです。「つれづれ」は手持無沙汰なさまをいうのですがここには王朝女性の性的な倦怠感がかもっています。恋人に会いたくてこころは燃えているのに会えずに体を持て余している感じです。ぼくらはなにかにつけて結果をもとめがちです。特に現代はそれを求められるようです。「即戦力」なんて嫌なことばがとびかっています。しかし、結果がむなしいと知りながらそうせずにはいられないという心情もあります。このうたはそんな非合理的な心情

を嘆き、あるいはいとおしいでいるうただとおもいます。  
（「つれづれ」は兼好法師の「徒然草」の冒頭の言葉としてよく知られていますが、大野晋さんの古典基礎辞典によれば、「これ以上続いてほしくないと思う状態が単調に続いて、そこから脱却したい、変化したいと思ってもできず、所在なく、心が晴れないさま」とあります。それが近世では「つくづく」の意味に使われたといひます。）

## 芭蕉の軽み以後（45）

光成高志

延宝七年に刊行された池西言水の「江戸蛇之鮓」に入集された句の内一句。この句集発句三二九、作者一五六人に及ぶ。

和蘭陀も花に来にけり馬に鞍

桃青

江戸は花満開、この花を見にオランダの使者も遠路長崎から馬に乗ってやって来た。この年の蘭人の江戸参府は三月一、五の両日江戸城に登城、騎馬によるしきたりの通り馬に鞍をつけて花見に来たわい。謡曲鞍馬天狗に「花咲かば、告げんと言ひし山里の、告げんと言ひし山里乃、使は来たり馬<sup>んま</sup>に鞍。鞍馬の山乃雲珠櫻<sup>うずぎくら</sup>。手折<sup>たおり</sup>枝折<sup>えり</sup>し<sup>おり</sup>をしるべにて、奥も迷はじ咲き續く。木蔭に並み居ていざいざ、花を眺めん」の前の詞章をもじって使った。もう一つは  
草履の尻折りて帰らん山桜（雨降りければ）

桃青

草履の尻を折り、ついでに山桜も折ってさあさあ帰ろう。千載集に「一枝は折りて帰らん山桜・」がある。この詞のもじり。「折りて」を草履の尻と山桜の両方へ掛け、着物の尻端折<sup>しりばし</sup>り<sup>ばし</sup>の意味も掛けてある滑稽。言水は前年「江戸新道」を編んでいる。発句二二五、作者一〇七人。なんと俳諧師の多忙なことか。桃青もその中にいたのだ。この年の秋には似春、四友兩名の上方旅行に際し、四友邸で送留別三吟百韻二巻を興行。見渡せば詠<sup>ながむれば</sup>見れば須磨の秋

桃青

見渡しても眺めてみても、見れば見るほど須磨の秋はあわれ深いことだろう。明らかに源氏物語の心づくしの秋風を踏まえている。四友の付句は

桂の帆ばしら十分の月

四友

似春の付句は

似春

盃に文を飛ばする雁鳴いて

まるで光源氏が須磨の海にせり出す渡殿で月の宴を張っている場面を自らに引き付けているようだ。更に前書をつけて

「土屋四友子を送りて鎌倉までまかるとて」

霜を踏んでちんば引くまで送りけり

桃青

「ちんば」は禁句だなんて江戸時代は言わない。浅野源左衛門の瘦馬よろしく、跛<sup>ちんば</sup>をひくほど遠くまで来たことよ。これも謡曲「鉢の木」の佐野源左衛門の瘦馬

を連想させた滑稽。ちんばは瘦馬からの連想である。遠くまで足をびよこたんびよこたんしながら送りに来た。惜別の情が籠るではないか。

年末には才丸撰の「坂東太郎」が刊行され、桃青の発句も入集される。

今朝の雪根深を園の枝折哉

桃青

雪に覆われた銀世界の朝、わずかに頭を出す葱の緑が、菜園の目印、枝折になっている。卑近な葱を枝折に見立てたところが俳諧なのだ。

こうして延宝七年が暮れる。廻りも、桃青自身も俳諧師として目のまわるような多忙の中にいたことがわかる。身内を養う生活もあったのだから尚更だ。

## 我孫子日記

11/20	例会
11/29	観劇
12/4	*2 蜜柑狩
12/6	金子兜太講演会
12/11	出版社と顔合わせ
12/18	例会

\*名にし負ふ皇帝ダリヤ上を向け

\*2 蜜柑の薔乾きて白い花の如

河口淵魚跳ね鷗と百合鷗

木の株のありて蜜柑を剥いてをり

高志

〃

〃

みち

蜜柑より海を讃える蜜柑狩

〃

## 編集後記

孝三さんのお便りの通り今年もあつと言う間に年末となりました。来年は夏の事を忘れず益々安んぜず、せっかちにならぬようにと思っております。五周年記念号の原稿を待っています。どうかもう一回、選句して一月中にはお示しく下さい。昭七さんからは全て稿を頂きまして。次の十周年記念号を二里塚として目指したいと思っております。それまで皆様と共に健康で迎えられよう祈ってやみません。来年はきつといい年になります。確信しています。よいお年を！

白金菫	第58号	平成27年12月発行
編集・発行人	光成高志 (Ed. & Fax)	7187 1068
発行所	〒270-1119 我孫子市南新木2-14-17	
表紙の題字	加納綾女 写真	12月22日の白金菫